

P-55

救急医療センター開設後の外傷患者の検討

(救急医療センター)

○鈴木 秀道、小池 莊介、牧野 義文、
池田 裕介、池田 譲治、村岡 麻樹、
本間 宙、片野 素昭

本院救急医療センター開設に伴いベッド数は8床から20床に増設となった。今回我々は開設後の外傷患者について検討を加えたので報告する。

対象：1993年6月当救急医療センター開設から1995年3月までの22ヶ月間における全受診患者数は1518例であった、このうち外傷症例は358例(23.6%)であった。外傷患者の平均年齢は39.1才、男女比は3.3:1で男性に多かった。外来診療のみの患者は104例で34例が帰宅もしくは転送となり、70例が外来で死亡した。254例は入院を要した。尚、来院時心肺停止(以下DOAと略す)症例は71例で、心拍再開し入院した症例は5例であった。

症例を受傷機序で2つに分けると、鈍的損傷305例、鋭的損傷53例であった。また、損傷部位診断が十分でないため、DOA症例を除いた277例について部位別に延べ数をみると、鈍的損傷では頭部99例、顔面/頸部18例、胸部68例、腹部33例、骨盤41例、打撲/挫創など表在損傷のみ27例で、頭部外傷症例が圧倒的に多く約1/3の症例に合併していた。鋭的損傷で創の部位は頭部1例、顔面/頸部3例、胸部17例、腹部23例、四肢8例であった。

更に各々の症例について重症度の指標としてISS(injury severity score)を算出し、合併症、予後、在院日数など治療成績について検討を加え報告する。

P-56 予定所要時間と実所要時間の差からみた手術運用状況

(病院管理学教室)

○大原達美、益子研士、
渡邊好文、村越昭男、
中村捷夫、北村昌之、
安斎育郎、名和 肇
(中央手術部) 小川清枝
(板橋中央病院) 中村哲夫

【目的】現在当院では手術室の利用状況が過飽和となり改善を検討しているが、障害の1つとなっている手術予定所要時間と実所要時間の違いについて資料を作成し、先生方により正確な予定時間の記入をしてもらう事を目的とした。

【方法】平成6年4月～平成7年3月までの1年間における手術部センターで施行された5,668件を対象とした。集計は中央手術部で受付登録された申込み内容の予定所要時間と術後の実所要時間との時間誤差を基に行った。この時間差から予定時間内終了群、時間延長終了群(予定時間超過)および時間短縮終了群(予定時間未満)の3群に分類した上で、所要時間60分単位に振り分けて集計を行った。

【結果】予定時間内終了群は1,662件、時間延長終了群は3,796件(平均誤差時間 +91分/件)、時間短縮終了群は210件(平均誤差時間 -80分/件)であった。申込み時の予定所要時間を基に総手術件数の構成比をみると、約85%が1～3時間に集中していた。しかし実所要時間では、2時間(26%)を頂点とした、長時間帯へ向った反比例的な構成に変化していた。この変化の原因は、時間延長終了群の中でも延長が2時間を越える1,799件の分散が大きく関与していると推察された。予定所要時間を基準とした60分延長率では、特に1時間予定手術が54%に達していた。時間短縮終了群は平均誤差時間(-80分)では長いものの、件数自体は4%と少なく、構成比変化の要因にはなりにくいと思われた。

【考察】現状から、全般的に予定所要時間に対して実所要時間が延長傾向にあり、予定通りに手術件数を処理出来なくなっている。今後、効率的な運用の為にも、予定時間の正確度を上げるべく努力が必要と考えられる。